

筑波大学名誉教授 村上和雄

遺伝子をオンにして死ぬ時に後悔しない人生を

むらかみかずお 昭和11年生まれ。38年京都大学大学院博士課程修了。53年筑波大学教授任。遺伝子工学で世界をリードする第一人者。平成11年より現職。著書に「心の力」(共著)致知出版社など多数。最新刊にスイッチオンの生き方(致知出版社)がある。

おつしゅういちゃ 昭和51年茨城県生まれ。筑波大学医学部卒業。内科医になるも、苦痛緩和の医療の大切さに気づき、日本ホプスト病院ホスピスに勤務。当時日本最年少ホスピス医の一人。平成20年より松原アールパークリニクに勤務し、終末期医療の実践を行っている。著書は医療関係者扱ったものが多く、近著に死ぬときに後悔すること25(致知出版社)がある。

内科医として見つけた 治らないという現実

村上 大津先生は二十六、二十七歳から緩和医療を行っているというのですが、いままでにどのくらいの方の終末期を診てきたんですか。

大津 約十年で千人を超えました。村上 まだ三十代そこそこだというのに、すごい経験をされていますね。

緩和医療医とは、終末期の患者さんの痛みや苦しみを和らげるのがお仕事だと聞いていますが、何か資格のようなものがあるんですか？

大津 いままでにはなかったんですが、ようやく今年から専門医制度ができました。資格を取るには、緩和医療をしている施設に行つて研修を受け、末期がんの患者さんの痛みや苦しみを和らげる症例をたくさん経験することなどが条件になります。

村上 日本でのどのくらいの緩和医療医がいるんですか。

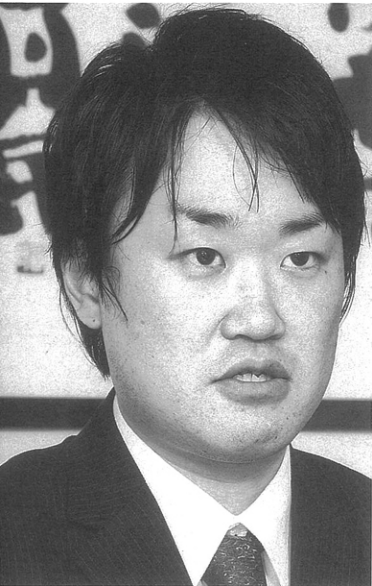
大津 医師の数は全体で約二十七万人ですが、緩和を専門にやっていらっしゃる先生は数百人程度だと思います。

がん患者を担当することも多いのですが、次から次へと亡くなっていくわけです。しかも終末期の患者さんは、痛みや苦しみにさいなまれることが多い。

村上 憂鬱になりますか？
大津 学生時代「緩和」について少しは勉強しますが、いざ実地に立つてみると、末期がんの患者さんの多くが痛い、苦しいと唸っているという状況を見るのはつらかったですね。治すために医者になつたのに、治らないことばかりやっています。本当に世の中の役に立っているかと悩みました。

そんな時に、いまだ大阪大学の教授になられた恒藤暁先生が書かれた「最新緩和医療学」という本を読みました。その本には、痛みはこういふふうに出置する、息が苦しい時は、食欲不振時は、と症状ごとに具体的な処置方法が書かれています。

本に出てくる緩和医療を実践してみると、六十代の女性の患者さんだったんですが、それまで非常に苦しんでいたのがピタッと止まりました。昨日まで悪苦しい、食欲もない、だるい、動けないと苦しんでいた人がちょっと治療し



緩和医療医 大津秀一

日本はいま、大きな転換期に差し掛かっている。強きもののみが生き残る世界から共生の世界へ、目に見えるものだけの世界観から精神的な世界観へ……。今回は、三十代前半の若さで千人の患者さんの終末期を見届け、著書『死ぬときに後悔すること25』が話題になっている大津秀一医師をお迎えして、後悔のない人生を送るために大切な心得をお話いただきました。

と思えます。

村上 もともと、大津先生はどういう経緯で緩和医療医になられたんですか。動機やプロセスをちょっと教えてください。

大津 僕は小さい頃、体が弱くてよく病院に行っていました。医者になろうと思ったのは、その時の小児科の女医さんに憧れてです。はしかの時、僕の口の中を見て、「いまでの熱と違うらう。大変よ」なんて言われて、なぜそんなことが分かるんだろうと。病気をしっかり診断して、さっと治せる医者になりたいと思いました。

最初内科医からスタートしました。でも医者になってつくづく感じたのは、世の中には治せない病気が非常に多いということです。村上 医者は言いにくいよね、治せないって。

大津 「先生、私の高血圧、よくありませんか？」と聞かれて、「薬を飲んでください」と答えるしかない。糖尿病、膠原病、リウマチ、パーキンソン病なども一般に根治はできない。治せない病気だらけなんです。

村上 進行したがんも治せない。大津 内科の若い医者は、末期の